「山はみんなの宝！　全国大会」

－山の自然保護と適正利用を考える“国民会議”立ち上げに向けて－

資料集

日　時：2010 年 11 月 30 日（火）17：00～20：00

会　場：日本青年館　地下 1 階　中ホール

主　催：「山はみんなの宝！全国大会」実行委員会

協　賛：東京電力株式会社　電源開発株式会社
株式会社モンベル

「山はみんなの宝！全国大会」開催にあたって

日本は山国である。富士山や日本アルプスのような高山もあれば、日常生活の延長線にある身近な里山まで“山”は多様であり、変化に富んでいる。それらの山々から私たちはさまざまな恵みを得ている。森や生き物を育み、生活の基本である水や電力の供給源でもある。山の恵みに感謝し、その自然を守ることは、私たちの生活基盤そのものを守ることにつながることと思う。

今回開く「山はみんなの宝！全国大会」はそうした“山”に対する畏敬と感謝の念を多くの人々に喚起し、山での慎み深い行動を促すことを目的に開くものである。それを　実効あるものにするためには、山の現場が今どのような課題を抱えているかを認識しようとの意図からテーマとプログラムを設定した。

幸いさまざまな立場の方々が多岐にわたって山の実情を語ってくれることになっており、白熱した討論がなされることと思われる。その成果は「宣言文」としてまとめることにしているが、それは結論ではなく、山の自然の保護と利用のあり方を問う、まさにスタートと位置付けるべきだと思われる。ここでの討議が水紋の如くに全国の各界各層に広まり、まさに“山”が“みんなの宝”として、国民共有の財産として、一層大切にされる時代が来ることを願っている。

今回の開催にあたり、地方公共団体、民間企業、団体、市民団体、マスコミなど多方面の方々にご協力いただいた。ここに深く感謝申し上げたい。

2010 年 11 月 30 日

「山はみんなの宝！全国大会」実行委員長
奥島　孝康

◆プログラム

16：30【開場・受付け】

17：00【開会あいさつ】　　奥島 孝康（「山はみんなの宝！全国大会」実行委員長）

【問題提起】“ いま、山の現場で何が起こっているか ”

－山を守るために「問題提起」し、「役割分担」をみんなで語ろう－

第１部「山の植生保護　－高山植物の盗掘、踏みつけとシカの食害－」

中村　光吉（ＮＰＯ法人日本高山植物保護協会・三ツ峠山荘）
森　　孝順（ＮＰＯ法人山のＥＣＨＯ理事）
［コーディネータ］森田　洋　（元・山と渓谷社編集長）

第２部「山岳環境の保全と利用　－登山道の整備・管理と入山者の自己責任－」

小島　実　（東京電力株式会社環境部尾瀬・緑化グループマネージャー）
佐々木　泉（北アルプス山小屋協会会長・阿曽原小屋）
椎名　宏子（ＮＰＯ法人尾瀬自然保護ネットワーク）
吉田　直哉（神奈川県自然環境保全センター）
［コーディネータ］菊地　俊朗（山岳ジャーナリスト）

第３部「水環境と山のトイレ　－トイレ・し尿処理対策と適正利用のあり方－」

浦野　岳孝（八ヶ岳観光協会会長・夏沢鉱泉）
白石　崇　（愛媛県山岳連盟会長）
日髙十七郎（屋久島町長）
［コーディネータ］森　　武昭（神奈川工科大学副学長、日本山岳会常任評議委員）

19：00【パネルトーク】「山の恵みと自然の保護と利用　－国民会議の立ち上げに向けて－」

奥島　孝康（公益財団法人ボーイスカウト日本連盟理事長）
ＫＩＫＩ　（モデル・女優）
辰野　勇　（株式会社モンベル代表取締役会長）
田中　文男（日本山岳協会会長）
宮口　侗廸（早稲田大学教授）
［コーディネータ］小澤紀美子（こども環境学会会長・東海大学教授）

19：55【宣言】

20：00【閉会あいさつ】　　上　幸雄（「山はみんなの宝！全国大会」実行委員会副委員長）

20：10【交流会】20：10～21：30　会費：5,000 円

第１部「山の植生保護　－高山植物の盗掘、踏みつけとシカの食害－」

中村　光吉（ＮＰＯ法人日本高山植物保護協会・三ツ峠山荘）

まず私の所属している日本高山植物保護協会は山梨に本部があり、それにより植物は他県よりも条例や流通に早くとり規制がかけられております。それに県でアツモリソウの保全に対し早くより毎年の個体数の調査、周辺の植生環境などアツモリソウ属に関して早くより重要性を認めそれにより私も県からの専任で守るのみでなく、蘭科植物ぜんたいを理解するようになった次第です。今から二十年くらい前のバブル経済期はアツモリソウの大きな株に九十万円くらいの高額な値がついてみな蘭科植物であることすら知らない地元の人々も業者に売るためでなく自分が珍しいものを持っているという虚栄心が強かったように思います。もちろん今では盗掘に対しては量刑も重く一年以内の懲役という厳しい条例もでき、さすがに盗掘も減りましたが三つ峠に以前よりあったとかインターネット上で見たとか、今でも花の時期には毎年たくさんの方から聞かれます。それで私たちのメンバーと相談し、なんでも見せないのは逆に盗掘を招く恐れもあり、それならば私たちの仲間として一緒に保護活動や、独占的に増えているササやテンニンソウをそれらの事の中でアツモリソウの野生のものも見てもらい一緒に排除してもらい、仲間となりました。メンバーの中に大学院で植物学を学んでいる方や、菌類等の専門家もおり、また地図がなくとも４，５年くらいの間であれば発生したところや枯れたものでもすぐに分かる方、本当にアツモリソウに関してエキスパートな方々が現在集まっております。踏みつけに関しては現在柵でほとんどの所は道から仕切られており、柵を設置する前に比べると格段に少なくなりました。

現在は盗掘者以外の写真を撮りに来た方々が入り込むところもあり、本人達は全く悪いことをしている自覚もなく、そのようなところには条例書きをつけることが最も有効です。また写真家とはいいますが自分だけ変わった写真を写したいだけで、そもそも自然界のことなど全く理解できてないような方が多いように思います。

次にニホン鹿食害は以前より時々は草原内に入っていた形跡はあるのです今年のように木の樹皮を食い荒らし、また草原内のオオバギボシのみ集中して食べられました。もちろんこのまま放置すればオオバギボシだけでなくアヤメや菊の仲間、当然アツモリソウも食べられます。私たちのボランティアグループでは四月ごろ林の中のヒロハツリバナが食害にあった時点で資料を県や地権者に提示し、早く対応してきました。それにより現在十一月より柵を環境省より提供して頂き全長で 350 メートルの県有地に張ることが可能になりました。また次の柵の設置も県や町の財産区の方たちに自然界のことをよく説明し同意を頂ける流れです。まさに財産区というお金よりも大切な自然環境を未来に残すという大きな理解、これもアツモリソウの咲いている時管理者の方達に見てもらい、これは残さなければならないとアツモリソウ自身が自分たちの美しさを皆に伝えたように思います。今後は今ある個体をより増やし自然界のメカニズムを少しづつ理解できているように思います。これらも二十年以上の自然を良く見てきたことが根底にあり、遅からず発芽率を高めることが可能の印象です。皆様も私たちの活動に繋がって頂き、アツモリソウを通じ自然や人間が変えてしまった生態を元に戻す活動にご賛同頂けたらと思います。

なお http://oohito.com/mitsutouge/をご覧ください。

ニホン鹿の増えたこと、それらにについての考察

当然人間が入ってくる以前からいたと思われるニホン鹿は生態系の中で一定の役割（人間に食べられる事も含めて）を果たしてきたものが今一番の悪者にされている。戦後の数十年間の人間の活動により生態のバランスが崩されたことは確かであり、今結果としてそれが人間の方に来た感があります。温暖化、ハンターの減少、奥山までの造林事業、それにともなう砂防ダムなど挙げればいくつでもあるのですが、それら全体に関し感じることは、縄文時代より日本人は山に対する尊敬の念を持ち続けてきたことです。縄文土器などの渦巻き模様なくても使用には問題無いのですが、火の神や水の神という概念がみてとれます。日本はほどよく南北に長く、海峡によって大陸より隔たれており、対馬海流により日本海にも南の海流が流れて、それらにより魚も豊富であり、日本海側山脈は世界でも有数の大降雪地帯になっておりますそれらの清らかな雪解け水で世界一の品質のお米もとれるわけです。当然それらの感謝の念が日本に、山を中心とした宗教観をねずかせ山岳の修験など独自の宗教の成立も見られます。かつての三つ峠もそうなのですが、里の経済的価値中心の世界から離れて新たに生まれ変わる欲や物に支配された世界をはなれ、先達の方々に導かれ山中に入り行をする、全く他の大陸の国々から見たら理解しがたい無益なことかもしれません。また大陸の方は侵略による戦いに明け暮れていましたからそれどころではないはずです。

それら固有の自然観が宗教の教義よりも昔話として継承されています。山から現れる賜物は水を意味しているようです。奥山は先祖霊の住まわれるところですから自分たちの先祖がそのようにしてくれるわけです。それらを受け取るのは大概おじいさんおばあさんで、これは幼児の生存率が低かったことも関係しているようですが、間もなく先祖霊のなる方達が先祖から受け取ります。よく話では間違いを犯します。鶴の恩返しでは見てはいけないところを見て、鶴はいなくなります。これらは人間に対する戒めなのです。山からもたらされる様々な恩恵を大切にしなさいという事です。私たちの世代はこれら昔話を知っており、子供時代には野山、川、湖が遊び場だったわけですから、自然に理解されていたように思われます。鹿に戻りますがすでに朝霧高原のあたりでは私もよく見ますが、夕方車道を通りますと、昼間富士山の林の中にいた鹿が牧草地に牧草を食べに移動してくるのとよく出くわします。車とぶつかる事も多いと聞きます。それらはもう牧草の味を知ってしまったのですからある意味そこに定住してると考えたほうがいいのかもしれません。それならそこで人の管理のもと鹿牧場を作り流通をさせたらよいと思います（牛はそのようにして人間が改良したわけですから）山の中で増えたもの、私の印象では皆動物たちも林道を移動します。獣道もありますが鹿も熊も歩きやすいところを通ります。現在日本中の山どこでも、林道の無い所はありません。人間の都合だけで動物たちの行動圏を変えてしまい、植林地には柵を同時に作りますから、追い出された鹿は高い所よふもとに降りてくるのは当然の印象です。また樹皮を食べるのはミネラルを補うことが目的ということもどなたか言っていました。そうかもしれません。奥山に自然林があり林道が無ければそこにいることも可能であったと思います。彼らの居る場所を人間の都合で奪ったことはただたんに柵を作り続けるということよりも林道の意味や自然林の価値を再構築する時期だと彼らが暗示している感じます。

水神

山域で拡大するシカの食害

森　　孝順（ＮＰＯ法人山のＥＣＨＯ理事）

ここ数年、南アルプスに通っているが、山の様相が大きく変貌してきたことを実感している。かつて、聖岳直下の聖平の一帯は、ニッコウキスゲの咲き乱れるお花畑であったが、今は見る影もないほど荒廃している。三伏峠の高山植物群落も消失している。仙丈ケ岳では、ボランティアの協力により、登山道の両側に、シカの食害から植生を守るためにフェンスが設置され、その中を登山者が歩く場所も現れた。シカの群れが、低山帯の里山から亜高山帯に登ってきている。

以前から、奥日光・戦場ヶ原では湿原を守るために防鹿柵が設置され、日光白根山では、シカの食害で消失したシラネアオイの群落を復元する活動も行われている。

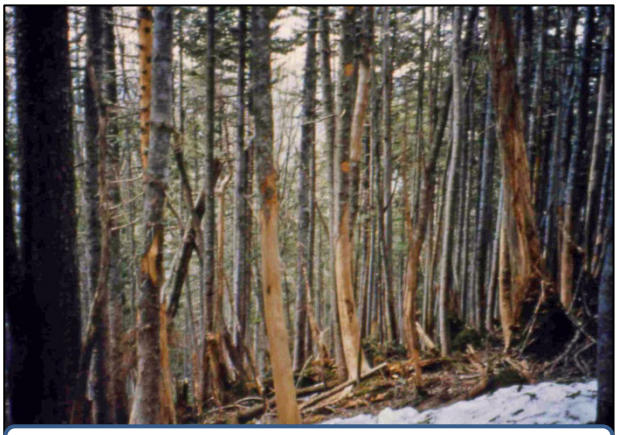
奥秩父の山々はササが食べられて林床が明るくなり、異様なほどに見通しが良くなっている。その中でマルバダケブキやバイケイソウなど、シカの嫌う植物が勢力を拡大している。モミなどの針葉樹は、樹皮が食べられないように幹にネットを巻いたり、防鹿柵で保護している。

十数年前、山歩きの最中にシカに出合うことは、きわめて稀な出来事であった。今や丹沢山系では登山者の休憩しているすぐ脇で、シカが悠然と草を食んでいる光景が当たり前になっている。北海道では、シカの放牧場ではないかと見間違うほどに、シカが群れで移動しているのに出合う。

山域におけるシカの増加は、自然植生の変化だけではなく、過度の食害により裸地化を招き、表土の流失により、渓流の生態系にも影響を与えている。山の豊かな生物多様性を守り、持続可能な利用を進めるうえで、もはや放置できない深刻な問題となっている。

支笏湖畔に出現したエゾシカの群れ

奥日光・戦場ヶ原の防鹿柵



日光白根山の針葉樹（シラビソ）の樹皮食害

南アルプス・三伏峠のボランティアによる
シカ防止柵の設置

ニホンジカの生息域の拡大

環境省により継続的に行われている「緑の国勢調査」のニホンジカ分布図から、30 年前と比べてシカの生息域が全国的に急速に拡大し、同時に、シカの個体数が大幅に増加していることが分かる。

シカの食害問題は、知床半島、阿寒などの北海道東部からはじまり全道に拡大しているほか、東北地方の降雪量の少ない太平洋側、日光、尾瀬、秩父多摩甲斐、南アルプスなどの国立公園の山域、丹沢山系、大台ケ原を中心とする紀伊半島、四国剣山山系、九州の霧島地域、屋久島に至るまで、全国各地で発生している。

繁殖力の強いシカの増加は、山域の生物多様性を脅かし、希少な植物群落の消滅を招いている。また、一部の山域では林床を被う植物の消失により保水力が低下し、土壌の浸食も発生している。シカの個体数の急激な増加は、山の自然環境に深刻な影響を与えている。

雲取山周辺の植生の変化

かつて、雲取山（2,017m）から七ツ石山に至る稜線は明るい防火帯となっていて、シモツケソウ、ヤマホタルブクロ、ハナイカリなどが咲き乱れるお花畑であった。現在、シカの食害により、シモツケソウは矮性化して残っている。登山道沿いには表土の浸食が見られる。植生は単純化して、シカが食べるのを嫌うマルバダケブキの群落が拡大している。

1980年代の雲取山山頂付近の植生

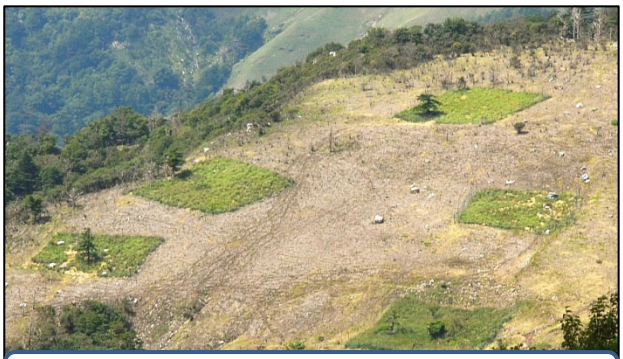
2009年8月撮影、表土の浸食が発生

稜線にシカの食べないマルバダケブキの群落

林床のササ群落が食圧により枯死

四国剣山山系・三嶺の森のシカ食害

高知県の物部川源流である三嶺（1,893m）は、徳島県との県境に位置し、四国有数の原生林や希少種植物が残っているところである。近年、この山域でシカが急激に増加し、モミやカエデ類の樹木被害やササ枯れが進行して、土砂崩壊も発生する深刻な状況となっている。



三嶺･カヤハゲのササ枯れと樹木被害状況

シカ防護柵の設置で回復した植生

南アルプスの高山植物群落の変化

南アルプスは、わが国における最も南にある高山植生が分布しているところであり、随所に見られるお花畑は、訪れる登山者を楽しませている。

近年、この貴重な高山植物群落が、シカの食害により急速に減少している。北岳の大樺沢上流部、仙丈ケ岳の馬ノ背付近、熊ノ平、塩見岳周辺、三伏峠、聖平、茶臼岳など、ほぼ全域にわたり植生の変化が進行している。高山植物群落の消失は、これらに依存している高山蝶やライチョウなどの野生生物にも大きな影響を与える。ボランティア団体による防鹿柵の設置、植生復元などの保全活動が行われてい

1985年頃の聖平（薊畑付近）、ニッコウキスゲの大群落の中を登山していた。
出典：信濃毎日新聞社発行「南アルプス」

2008年夏の聖平、シカの過度の食害により、植生が単純化して表土の浸食が発生している。（薊畑から聖平を撮影）

ボランティアによる表土の浸食防止と高山植生の回復活動が行われている。（塩見岳付近）

北岳大樺沢の上流部のダケカンバ林にもシカが現れ、高茎草本を食べている。（二俣上部）

南アルプスの貴重な高山植物群落は、シカの食害により消滅の危機にさらされている。

登山道沿いは、シカが食べることを嫌うマルバダケブキの群生地となっている。（小河内岳付近）